

岡崎森林組合 組合員アンケート調査結果の概報

岐阜県立森林文化アカデミー 森と木のクリエイター科有志5人 + 丹羽健司

平成30年6月の岡崎森林組合総代会などで実施した標記のアンケート結果について、概要を報告します。この内容は令和元年6月の同総代会においても資料をつけて詳しく報告しましたので、詳しい結果を知りたい方は森林組合までお申し付けください。

●はじめに

この地域では明治期には山本源吉翁、昭和期では1億円林業など先人たちの取り組みと、近年では木の駅プロジェクトはじめ新しい取り組みへの果敢な挑戦で常に注目を浴びている。しかし、全国で急速に山主の山離れが進む中で他地域と同じく苦悩は深い。特に山林境界、知識、技術、そして思いをどのように次世代に伝えていくか、さらに地域内でヒト・モノ・カネを循環させていく仕組みを構築して、持続可能な地域をどのようにつくっていくかが喫緊の課題となっている。今回その課題解決の一つとして、額田地域で枝打ち優良材が山元還元率を高めて正しく評価されて流通させるための社会実験を実施してきた。その一環として山林所有者の意識調査を実施した。

1. 調査の概要

－ 1. 地域の概要（略）

－ 2. 調査の手法と経過

調査は岡崎森林組合と共同で2018年6月から8月にかけて組合員を対象に行った。2015年農林業センサスによると、岡崎市の1ヘクタール以上の山林を保有する林家は1749戸。合計600通を手渡しもしくは郵送で協力依頼し、回収は全て岡崎森林組合宛郵送で315通(52.5%)の返送があった。この調査票の原型は、2002年に(現)豊田市で東海農政局が実施した「矢作川水系山林保有者の山林管理に関するアンケート」であり、その後同様の調査が岐阜県、鳥取県などで行われてきたもので、かつてそれらの調査を企画してきた丹羽が今回森林組合と協議して調査票の作成から回収までを担当し、集計と分析は主として岐阜県立森林文化アカデミーの学生有志5人が集計し、分析までを行った。

2. 考察

今回調査の主題は「山のミライをアキラメナイ」こととした。そのために今できることは何か。一つはアキラメかけている人の思いを汲み取ること、もう一つはアキラメさせないアプローチを探ることとした。考察にあたって課題は多岐にわたったが、前者を「山林管理の将来」の設問を切り口とし、後者を「境界の把握」の設問を切り口として、この2点に絞って考察を試みた。

まずこの2つの設問についてそれぞれ16年前の豊田市の調査(n=704)との比較を試みた。単純な比較は乱暴すぎるが、山林管理の将来は「自力管理」が約10%減少し、その分「ほとんど放置」が増加している。「境界把握」レベルは約70%わかっていたのが逆転し約60%がわからなくなっていることが読み取れる。

山のミライの劣化が確実に進行していることがうかがわれる結果となった。

図1-1

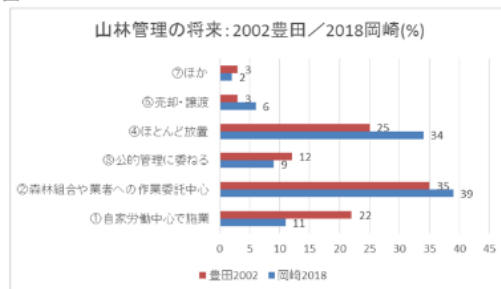
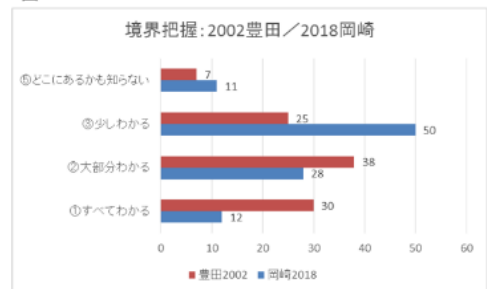
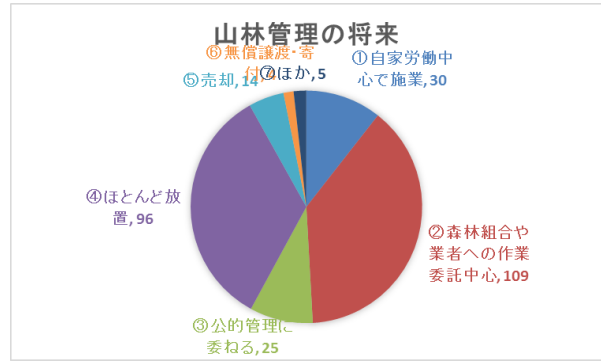


図1-2



－ 1. 山林管理の将来認識から見た山主の姿

「お宅の山林の今後（約 20 年後）について」「お宅の山林の管理は将来どうなりますか」との質問に 3 分の 1 が「ほとんど放置」と答えた。その回答者はどのような山主たちなのか？境界もわからず、技術も体力も持たない高齢者の増加と経験のないまま代替わりが進んだ当然の帰結とアキラメていいのか。それはそのまま放置林の増加に直結し、さらに無関心な山主を再生産することにつながる。



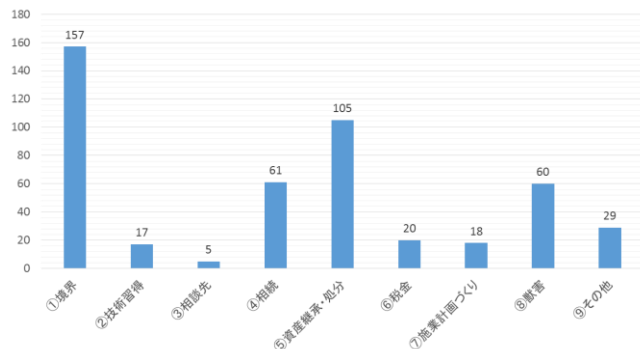
他の選択肢「自家労働中心で施業」「森林組合や業者への作業委託中心」「公的管理に委ねる」「売却」「無償譲渡・寄付」はそれぞれ一つの山主の決断や覚悟であるのに比べて、「ほとんど放置」とは山主の無関心あるいは問題先延ばしで、無関心な山林ともども今後地域にとっても最も厄介な存在になるのは必至である。

そこで、「放置」回答者の傾向の精査を試みた。ただ無関心に「放置」と答えているわけではない苦悩する山主の姿が浮かんできた。（略→詳しくは本文）

持山の 20 年後の姿を問われれば、知識や技術を持たないこと、高齢や後継者のいないこと、林業への失望感などから「ほとんど放置」と答える山のミライをアキラメたかに見える山主の事情と苦悩は深く多様である。早急に今回の調査結果を活用したきめ細かな対応が求められる。

－ 2. 境界把握レベルからみた山主の姿

「あなたのお宅の山林管理について困っていることは何ですか？」という設問に対して、最も回答数が多かったのは“境界”であった。また、「今後森林組合にどのようなことに力を入れてほしいですか？」という設問に対して最も優先順位が高かったのは、“境界の相談充実”であった。さらに「お宅の山林の境界がわかりますか？」という設問に対して、“すべてわかる”または“大部分わかる”と答えた山主は全体の 40%。半数以上が境界を把握できていないということがわかった。



（略）分析を通して、境界がわかっている山主は、山林への関わりが多く、意識の高い人が多い。そして将来的にも森林組合への作業委託や自家労働での施業などで山林の管理を続けて行こうとしている人が多いことがわかる。一方、境界がわからない山主は、これまで施業に関わった経験の少ない人や、境界を含め現在の山林の状況をあまり理解できておらず今後の施業に後ろ向きな山主が多い。

境界や所有山林の状況・価値がわかることが、山から離れてしまった山主の意識や行動を再び山へ向ける第一歩になるのは自明の理。そこで分析に携わった林業を学ぶ学生たちは 2 つの提案をした。

●提案 1：「山見会」（仮称）を開く。：山主が実際に自分の山林を訪れ、境界をしっかりと把握できるようにする機会を近隣山主とも協力して森林組合がコーディネートする。

●提案 2：組合員の山林に関する相談窓口を森林組合に積極的に作る。：これからの山林管理、施業の方法や木材の利用について、また相続・資産承継、処分、売却など幅広い相談事にワンストップで機敏に気楽に対応できる窓口が切望されている。

（文責：丹羽健司）